



正改
吉野名所記
全

ル 4
3588



目録
3588
卷

賣花老人編輯

改正 吉野山名所記

前編

奈良 樺廸舎藏

昭和十八年
三月三日
小田舞吉氏
長男友太郎
長男贈
書圖金

香雪 界

南

明治十九年中秋為

吉野山賣花老翁

東京万葉



吟詩叫絕



寥寥到處梅花

信燭并知是公家

之聲為在洛城名

輩一似來

位身壯氣本在茲

親三日秀之世掛

猿蒼心與香之來

輝暗淚流紅子

肥四十春

萬橋山梅五百

年冬情心在後古

後子の家来云向

芒神心芳物究

飛渡隨枝

芳名空作三首

黄石七十六石

吉野山名所記



改正 吉野山名所記 前編

吉野 平井賣花翁著

此冊子、芳名、花候、名、蹟、廢、寺、等、の、沿革、記載、而、路、次、を、
陳、列、大、和、國、中、の、吉、野、に、載、る、四、つ、の、坂、を、武、藏、守、を、載、る、を、細、作、と、
高、く、け、り、と、南、を、東、の、衆、山、衆、重、と、も、載、り、れ、は、吉、野、り、と、も、
中、に、大、崎、新、玉、の、岳、最、も、高、し、と、頂、上、西、傾、き、と、も、吉、野、山、南、西、
の、こ、に、在、花、の、頂、上、山、多、く、吉、野、町、乃、た、お、つ、き、中、の、も、も、吉、野、山、東、
の、も、も、の、こ、に、細、作、の、東、の、才、不、あり、次、小、泉、の、町、より、吉、野、山、の、東、と、
通、り、る、吉、野、山、の、東、の、才、不、あり、次、小、泉、の、町、より、吉、野、山、の、東、と、
上、市、の、吉、野、山、の、東、の、才、不、あり、次、小、泉、の、町、より、吉、野、山、の、東、と、
と、移、入、跡、あり、吉、野、山、の、東、の、才、不、あり、次、小、泉、の、町、より、吉、野、山、の、東、と、
坂、の、東、の、吉、野、山、の、東、の、才、不、あり、次、小、泉、の、町、より、吉、野、山、の、東、と、
た、の、東、の、吉、野、山、の、東、の、才、不、あり、次、小、泉、の、町、より、吉、野、山、の、東、と、
壺、坂、の、東、の、吉、野、山、の、東、の、才、不、あり、次、小、泉、の、町、より、吉、野、山、の、東、と、
吉、野、山、の、東、の、才、不、あり、次、小、泉、の、町、より、吉、野、山、の、東、と、

吉野山一望之圖

邊々春山別有天
 花開花落鎮依然
 可憐萬樹香雲暖
 曾護南朝五十年
 賴山陽

歌まよりのも
 軍書不遊 老翁山
 支考

むささぎ
 山ろ
 月夜の
 新やけ

蕉翁

義光集



是れくど
 をのりて路の山 真宗老人

志くまやちり所
 花のよけ山
 莫多

吉野山
 香も
 鳥のく 鳳朗





曾為此花留鳳駕
 南朝五十六年春
 西漢韓中秋

芳山深處有荒墳云是
 南朝第一君鳳輿不返
 無窮恨埋兮山花萬朵雲
 賴杏坪

芳山懷古

あつとらむといふこそあまの
 あつとらむといふこそあまの
 あつとらむといふこそあまの
 あつとらむといふこそあまの



花踐無處著啼鶯
 寺寺樓其室閑戲嬉
 杉檜参天春日黒
 荒陵誰序
 後醍醐 山陽外史

櫻雲簇々厭嶙峋
 妖色異香經雨新

もろとまにあされと
 之の山振る夜より
 卯のまゝ人もあり
 大僧正行尊



小天井
 大天井
 時ふる卯山の
 赤々晴やん
 雲の上り
 峯の月うけ
 僧正教範





文嶺馮園

わげららふ小笠の
 山はまじりて
 神をまつる
 聖澤の神
 西川上人

吉野名産 葛 榎 烟草 紙類 漆 茶 塗物
 杉 助 榎 漬 押花 古 杉 苗 洋 苗 桑 苗 檜 苗
 杉 苗 折 敷 木 杉 杉 松 葎 推 葎 花 籠
 銀 中 法 螺 貝 葛 葉 子 右 何れも 所 産 する 者 多

附リ吉野山古寺里林兼上市村金取丹下小雲葉五塚内三席氏
 の家傳之又下市村平維盛々々向跡所々今宅田跡物云
 此家つるへ箱蓋 鉛 幣 人 庫 心 を 嚮 人 唐 園 以 築 山 可 也
 いたつて風景 一 紀 あり 也

吉野山名所案内大概

吉野和名抄与之乃口本紀 吉野と云 續日本紀 萬葉集 入芳野
 又吉野と云 三吉野と云 吉野 那の山 上中下 三つを合せて 吉野と云

吉野

川源伯母殿... 紀品... 勢之川云大ぬの水とありとぞ

六田

むの田の段又むの田... 京よき... をかたるとん

一之坂

町のか敷より一里の石山の尾... 左有き... 町多し坂口が寺丁母石を建く標とん

長峰の果作

同二の行場... 村上... 松山の茶亭跡... 阿山

子乃乃茶屋

多き... 三十三丁目... 飯見の... 一之橋

飯見

の... 一之橋又大... 三十三丁目

再修の字あり

黒門

吉野町の熱つて是より人家づく... 同地 龍 日瓦上人の古像と云

夷身山

みくど... 夷身山... 夷身の山

差の尾坂

山... 銅乃華表... 吉野町

吉野町

吉野町... 銅乃華表... 銅乃華表

銅乃華表

銅乃華表... 銅乃華表

銅乃華表

銅乃華表... 銅乃華表

銅乃華表... 銅乃華表

飯見

本居... 丹波村... 水神社... 妹脊山

妹脊山

此地の川... 山お對... 山といひ

水神社

水神社... 初夜... 来て抜い

丹波村

丹波村... 山といひ

本居

本居... 山といひ

四子掛

四子掛... 山といひ

巡遊池

巡遊池... 山といひ

七郎

七郎... 山といひ

此山

此山... 山といひ

此山

此山... 山といひ

此山

此山... 山といひ

此山

此山... 山といひ

此山

此山... 山といひ

此山

此山... 山といひ

わたり倍しるを初むその外を善此脚踏山河を紅いほ情致なき
之の楓の縁を多ふ是りあり四時遊覧の客及山上多あり此人終
纏として間斷なく実小市地の一部會といふ一右旅店の外
坊中やうも坊子ある者ハゆる也里佐博抄お見へくは合の設
け深く彼之人山信此客を接するは又善くしん

二玉門北向金剛力士運法法其也

金峰山寺 後行者剛基

花王院現聖南向十八間四面
牛馬を左右観音弥勒各三丈六尺半の
あり横四間あり

威徳天神社 菅原公の灵を祀る

○実城寺 花王院の方三丁程
南約三帝五十六の
皇居の殿を重修し摸して改る
といふ付おはははの御敷か今も

東南院 日同上ノ剛基ニ長日
行法セシ寺ニ止人度
お存せり

人取大の方三丁程入に古き源ノ地

又諸寺社も貞和五年より師重の
者お焼せり知事公の町を再建あり
といふは我
務子社が八町津東入に
及北向ひは在山を

芳野新詠ニ五十神祠六十寺都來輪
煥大伽藍ト云

花王院現地五百石実坪あり三百石
子石附く元山のちのちを有家也
寺中おき云七十坊有る云云
五丁一ハ坊多しといふ中比世に
及收せり云云大開や山の時知行
を寄附せりれをふお傳りお上お地以
りといふ云

本宮水院

後醍醐天皇御遷都の御時
室抄あり久徳二年公孫の御時
中にもお存せり

櫻橋神社 務子社の右に五休亭の神社昔天女天降
而於山 一同古あり

柳振山 務子社の山也云

村正義隆院 花王院の御父系とも大塔云の原
命を授けけり小堂あり

井光の井 古聖前部姫祖井光院祭る也
日本記神本記に詳あり

務子明神社 右の宮に八太神の一筆置置命を祀る
静徳宮は宋の御時より又寺社の
程はたの宮をあらと心係の火災ありとて

喜善院 尚院大岩山申を造りて之聖護院
云毎年八岩の節に祀り成をあらハ
深因あり

橋本坊 尚山山伏大を逢竹物お存置置大
院を造りてお祀り

竹林院 篠山を解風系よきも之継ぎとて又
志ざれ橋本も本多し付置しは序あり
山信義院とていふも出橋本も山
の祀あり

接名基山寺 日同上人止た今廢れ

如意輪寺と云俗と宗

後醍醐天皇白王院

松翁庵跡 護の傍に

信濃忠房の居跡云

楠正行の墓

禪世の宮を築の地あり
といふは我
後醍醐天皇の御時
天白皇市自傳の御時又役
出城の御時
畠の寺あり

遠の園ニ画あるの長巻
の虫渡七言の御時
付あり云余勅祀北系
をより祀本何れも
寺の人の讀むの御時
とてお祀り

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

山神橋

天の宮より春の所の所すれなり
てん宮より

○愛媛の親者 雨降 親者といふは市事等の
多末を親者指すなり

○禪定寺 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○大石軍社 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○花也寺 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○辰区 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○雲井 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○滝 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○雲尾山世寺 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○子守明神社 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○高井寺 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○午頭天王社 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○金精明神社 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○美折山獄 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○奥の院 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○象谷村 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○掛本 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○水原 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○三石 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○水津 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○妙之 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○小宮 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○大滝 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○園地 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○又夏 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○村之 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○任一 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○名井 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○桂 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

○同不 此寺は近きあり
夫より西を中陰谷と稱す

よりよやく右山と安海乃たハ階あり
の及是分り

○安禅寺 飯高山と号 伽藍多 空室 在
皇王権現様形者他由未二天信房を
宮様院といふ

山の祖乃三丁粒
四寸正西事

又二丁粒りる下る小川至
若水
水
丈方より粒

西行庵室在
西行さくら

山上道是分五里
おてんぢぢり丈五井
● 困り共六丁川のつれた
終掛西ひらけ此取き竹端
終不と懸山と云ふあり
● 空下り中毎道云の強山
新加と懸 前鬼後鬼
の住所 乾坤門より
● 葛川玉置山と云ふき
紀前懸船と云ふ直
大津山伏及といふ

五丁粒 大たき村を
大津
西のの階と云ふ世の産此
院はありは右の川此院
大津家と云ふ云々

● 新の岩ち尾村

● 川上の西の陵

● 新侍安の院と云ふ

● 川上の陵

● 神谷村自天親王の首
を埋む

● 此より作毎に大倉系
近岩室古跡多あり
● 安の甲名

目標
▲ 改正
○ 廃止

芳山花時考

と云は此山のまゝ貝原守和巡遊記に云はけ山六回
の芳林藤より其の院まで一四餘町の石段あり所は右
右に並木の橋也又右右の傍も下は谷も左にだけ
ある所の谷もは橋多しすれは枚あり三月
ハ屯の世界と云川海一 樵の岩度母と云くして山は
あり一基ハ林藤より先花屏抄てやうなく山よ味のありて
あるの院よりおらる林鹿の草壁まで中の花壁ふある中
此花壁より上の草壁ふ開く中間大やう二十日斗
又院橋ハ井藤ふも所より在く去は季其の院の花
第の院は云々開くは初橋は云々あるも云々

嘆也凡は山の楓を皆一帯をわたりてを櫻ハ山中及民家
傍坊に一株も無し幸風をば一二年或は風を冬々
續きは冬の間色わく一處ふりて好むあり山
傍の田は四十年以前は今よりもは山は楓多しと昔
よりふあり又曰凡は山の冬は申下一時ふ不開と
ども大やうと云ふより六十五日山内谷路を望むは最中
と寸又里人教人同ふも皆如此之に但年の冬温ふ
とりては速あり是所より前の楓多し所のはうす
再あつるを此の所より少し前東の之に山のは一處
當前を櫻の坊よりけあつりたるの在り内まより
むくひたり各おを方二十町ほどの里た目ふんえ

く皆花の林ありありと一帯を櫻一帯とていんう
形一帯はあきおのいさひと志ろむくつとまあ形一
此所を乃とふりくはあきおとびとよそをさうま
此外の相もやとあや一處をわく櫻をばあきい
んくともあやわ一山はうくわとま又さそとあ
くむらひよさきいおあきい知よあるをんまらるのよあ
此所のむらひの山はうくま良茶の産よはる秋きい
所よりのもをんくたくと大あるを産形との内と
るやうよてはるまこ子ちうりよは花はお持けい
みて櫻を切事とま林は櫻木と新をばあき
ま櫻を賣らば若新の内は櫻は八里人へを

急らひまの是望人の偏と様とをささるもあはれ
源五撞現の神木もく帰らふと云はれて神の
宗と畏るゝあはれ 記上二箇ありて西洋あり
は餘贅を名に及ては
そもく南朝のむらゝ、妹く垂きく文禄三年き
は、紀の末世を同地山の花を畫しりひ一塚をふ
むる迄韻士特害と一毎ふ杖と曳くその杖奉を
へう迄時をのまゝ暖風ぬふ會して花前一定を以
て花と遊するふ及んてち和調寶山に入るとも
ま多の如く遺憾はあはれ因る今此花時考を
著して遊人の一助と成

一寛永十五年戊寅三月十日 は年五本本年三月廿四日
七十八日同日あり 散
惟く春の月和尙とまあひ花山紀行 云々
とてかおさ記遊をぬふれ 云々
を並みく和尙
尋春吉野路無窮 三月初如三月終
生滅於花時有限 遲羨謬我恨山風
一兼應三年甲午三月十七日 は年五春前年十二月十九日
八十七日同日あり 散
飛鳥井雅章の由記 云々
こちか山のふたとり入侍りぬちそとの花のやちり侍る
山の侍るゝあはれ 云々
一安永元年戊戌二月十日 は年五春二月十四日あり
宣ありて五十七日同日あり 盛

か後盤所花元の記ありの人もまゝ美人まゝに花をま

あひくる人のみづからさあおあがは

十二日

十二日

よき盤とたゝるやうにとあんなにうらやまをたふしふへ

一え祿元年戊辰二月 戊辰年正月四日あり 盛

の我とそひく技ねと申て青盤とのむよあもひえんととる
みふこよき盤の花よ二日とあつてあつたのたをうれ

のけーきふむひひあつたの月のあつたあつたあつたあつた

せぬり獨りよちて或は技ねの録よりをれ西りの技

ねみよよひかの貞室のれつくとあつたあつたあつたあつた

いふんを葉もねくつらふはとあつたあつたあつたあつた

えくさる風流のあつたあつたあつたあつたあつたあつた

一え祿二年己巳二月十九日 己巳年三月十五日あり 盛

貝原の南遊記のあつたあつたあつたあつたあつたあつた

のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

ある所のちまのしきよりいふれ日本に花と名付し
 あらうの梅宗最多く生る身と名付し花と名付し
 之目と名付しあまたのこと所丹の宮宗の海に名付し
 日本と名付しふるも名付しおと中界あたる廿日きの
 ふよりうみきく朝の曙れを名付しんとおもひし一花
 ふたやと名付し歌の詠念を名付しふ朝や知れ来
 して立寄り日本を名付し見谷彼峰^{カレコ}目の及ふ所を
 ありあやと名付し江宗今を名付しふ多きと名付し幾
 子孫と名付しふ花と名付し京色の名付しふるに名付し
 の及ふ知れしあはれ多しと名付しふるに名付しふるに
 いせんが常は知れしあはれ多しと名付しふるに名付しふるに

花世界ゆくべきに先ゆく目も海にさのふし一花
 あらめを名付しふるに名付しふるに名付しふるに
 みるふるに名付しふるに名付しふるに名付しふるに
 親と名付しふるに名付しふるに名付しふるに
 手と名付しふるに名付しふるに名付しふるに
 ふもあはれし名付しふるに名付しふるに名付しふるに
 くして名付しふるに名付しふるに名付しふるに
 名付しふるに名付しふるに名付しふるに名付しふるに
 絶ある所しあはれしと名付しふるに名付しふるに
 知と名付しふるに名付しふるに名付しふるに名付しふるに
 花と名付しふるに名付しふるに名付しふるに名付しふるに

ちるは東の院よりあきるまゝのむのりまゝと見
 一二月あきまゝに今は折のむ取多うはり
 ちるまゝの事一よ折折命来れりといはれり
 一寛曆十二年 壬午四月三日 は年三月十二日
八十一日月中ある 盛

浦遠はゆ道之記云と井と云ふ東川氏行ゆ
 ちる人のあてこゝちまゝにちまゝにぬちまゝに
 とまゝにちまゝにちまゝにちまゝにちまゝに
 ちまゝにちまゝにちまゝにちまゝにちまゝに
 ちまゝにちまゝにちまゝにちまゝにちまゝに
 ちまゝにちまゝにちまゝにちまゝにちまゝに
 ちまゝにちまゝにちまゝにちまゝにちまゝに
 ちまゝにちまゝにちまゝにちまゝにちまゝに
 ちまゝにちまゝにちまゝにちまゝにちまゝに

小菟やうつらふらふ
 小菟やうつらふらふ

長峰 ちまゝにちまゝに

ちまゝにちまゝにちまゝにちまゝにちまゝに
 ちまゝにちまゝにちまゝにちまゝにちまゝに

あくれい西宮に竹林院をたふし
 あくれい西宮に竹林院をたふし

ちまゝにちまゝにちまゝにちまゝにちまゝに
 ちまゝにちまゝにちまゝにちまゝにちまゝに
 ちまゝにちまゝにちまゝにちまゝにちまゝに

あつらふんするおの宮れさくくや暖ゆるはあや
昔清水まて散たつて侍る

志のなきくことと志のなきく事志のなきく事
こころあれとも

きのよんくもそとの様の後丹く我のやまもんとて
毛とま〜とこと下りておの坂もさしてえれはむはま
ちりさてぬ

いつのまに風のさそひ〜まのよん〜ちもとのさ〜
まより乃さ〜のさも〜ちりさてぬ

おちくもさあふ〜おちくもさあふとも〜おちくもさあふとも

一明和七年

庚寅三月廿一日

散

京師人上柳義啓紀行曰自上市渡吉野川過飯

貝十里始到吉野里所謂千本櫻者在里西端

一溪悉櫻樹自飯貝而來即途次所經望之

果如前言嫩葉微綠菁蔥彌目無復一點殘芳

矣聽土人之語則云今春花候太早十四日方盛會

風雨暴至飄落都盡凡此地櫻花皆單瓣細

花發最早落太脆遇風雨一掃為空如今春

花纔開便風雨却掠雖土人亦不見其盛也云

一明和九年

庚辰二月

廿七日同少雨

散

本居宣長其人菅笠日記云云

ころとて自ら申すといひて大うのち一掃のうらみも様の
 おちるるかきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 是のちの所をのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 名かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 今かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 うかきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 十かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 とかきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 一かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 一かきりていかにいふにむかひおちりぬるく

十かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 うかきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 とかきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 一かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 一かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 一かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 一かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 一かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 一かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 一かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 一かきりていかにいふにむかひおちりぬるく
 一かきりていかにいふにむかひおちりぬるく

一安永八年己亥二月十六日以年三月廿九日盛

上柳美啓再遊紀行云抵上市店主云櫻花全

盛在今明且而後喜可知也前濟芳野川

經飯貝村行且望之千萬櫻樹爛燦離披

欺雲奪霞彌嶺填谷勝絕不可譬言矣

一寶文政十一年己未以年立春正月元日未開松屋寺尚大人

神之御落日記云吾野の山入をむるたかやと探咲

そのまじりてさる月まゝかきもけらる云々

一文政二年己卯三月廿一日以年三月廿九日盛尾張人菅

成齋居士花風得意云出阿田望芳野川石瀨風景

真個雲林畫法既而渡川號柳津過六田登

第一阪多櫻所謂六田之花也高低十丁許出岡

上排行數百櫻樹所謂長峯之花也徐進坂路

如張弓強則洞也洞中緻密栽櫻踰一望千株

千株之上後眺長峯前望遠景號日本之花實

為海内勝境其名不誣憇千株茶店芳野街

口也中畧入櫻本房而宿焉三日乃賞花一望千

株又曰今茲余入此山居七八日細研究花之情大

槩晴明後五六日六田花發芳野次之奧院又次

之櫻有早晚花期不齊無日不華夫六田至

奧院天九四十餘里岡上溪間園林瀧圃或儔

列或子立或雲如集或星如散有鮮白者有
微帶桃紅者有專花者有嫩葉雜花者碧
樹之間菜花之上無地不栽櫻無處不見花仰
則疑雲俯則訝雪遠望近試景色隨顛步
而轉風光趁時日而移正是一般錦世界殆非人
間之有矣蓋櫻者山靈所愛之樹而土人敬而
護之花尚不摘而況於枝乎山中嚴禁前伐
表干官榜然櫻有榮枯時運所致以古捨今
櫻樹稍減前賢已論之士人亦知之近來相議
結社年年栽櫻苗千株以賽山靈珍重如此
且此山上適櫻種櫻種不擇羨惡移來栽之

不俟三年品格豹變世以為第一甲品矣又記中
多武峰之条云多櫻樹花信未到背面義人多
所思嬌情別是有嫌猜復知恨較芳山樹新
固花心不敢開嘗聞此花候與芳野畧同今
觀此光景思惟百端遂到西門生計先取
高野經二三月而後探芳野是為上策云
同書序秦鼎公曰花猶先父客猶孺子以二
三月往寢卧樹下以待之必得其所欲管子
能得預前之道者也有尋花者必來取法
一文改二年已卯三月廿四年立春前記
海老名翹存遊囊日錄云抵芳野山塵屋鱗次

四山之櫻皆單瓣花候已過不能窺其美是
可憾耳及中臺櫻曰最多名曰一覽千株益不
勝遺憾云々 按まゝに成齋土翹齋遊時と
等しく用落不同ある事ありの如し 以上余執
邊に在る如吉人紀中より芳山登望の目と抄出
しそ此年の香齋庵とものしくと其を批考するに
午の記あるに五月あり 午日斗世の中合意の
これ父の十日母友にて終末一きものもいふ
其六年の事臨み寄て不同あり 本居の傳その里
人といふもあめぬいふをいふと記されしを
より一室の一日の遠くひよては山の麓に
あきまるとも遊女社の事不孝なれとも遠境の人

前小載成齋居士の尋花の法は倣ふに縁
め立基六十日前後より期小生を南都初夜或
は多量根来抄に遊歴し 午本の盛りと同合
と事々に登名山を記すも余も今其世詳を
脱く此山に遊びし事とて暖晴雨と料酌し
幸ひ是の集りより合せり先事を記すも
名山に遊びし長生を記すは花を窺ひしは
酒はあふ借されて彼處にすらも山櫻も一時再
ぬ帰路西山とらむる遠境のむも遠路に
水咲これ飛ぶやうに心ひらりとけり難き
子交へられし一室の縁を六浪華よりあは

捷徑とやらんと歎服小童ありて翌日竹の角谷を越車坂
ふらふらと廿二日の年の別とあり六面の法師を道き一の
坂より名峰と樹奉ちと名ふれ一日子午に條に
なごのむらふととてとらえたり
千時戊申三月八日
正月元日より六十七日
小
廿二日京丹波より二日午一日のらととてとらえたり
此の山より夏安孫の西行谷の孫ハもとて余波も竹内も
けの壁を穿つ高片すはありとて抄殿多武家より夏も
りし人をもとてありてとてとてとてとてとてとてとてとて
く播及衆も同じくこれの夜の夜ぬるハありとてとてとて
りしとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
元藏王堂ハ元弘二年ノ兵火ニ罹リ今ノ堂宇ハ天正以前ニ再建ス
周圍十八間四面高サ十一丈二尺堂内ニ魚双ノ名木躑躅ノ柱アリ
周リハ天ニシテ高サ三丈一尺ト云

この六野の山は松のこり八月宮の眺むとてとてとてとて
寺の甚末五節織とてとてとてとてとてとてとてとてとて
りし代も博集もとてとてとてとてとてとてとてとてとて
集物とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
海見もとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
はとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
正行元はのとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
世の天徳も役優の雲はとてとてとてとてとてとてとてとてとて

明治二十年三月二十二日出版御届
同 四月六日刻成

大阪府平民

編輯人 平井佐一郎

大和國吉野郡吉野山三番地

大阪府平民

出版人 中澤治平

大和國添上郡奈良東向町廿五番地

芳雲餘情 全一冊

此書古今雅客の吉野を詠遺せし詩歌を拾ひ蒐むる一巻と
し多岐なるあり

吉野名所記 奥通

後編

此編口大峯あり花畑より弥山欽伽楊枝の山々を眺望する図を
書し編中山上を立て眺合の辻小篠 笹の窟普賢跡山欽伽神仙前
鬼奴田佐田笠置本宮と峯通り七十五ヶ 摩の行跡を記し明治維新
前当山本山兩脈の修験うけ政修行の跡をとむるの書より中にも西行上
人外高德の御詠をも入たる書あり

吉野名所記 大臺山部

續編

此編口大臺の全図を書しを編中上方より官滝大滝和田柏木の岩窟
を記し入波伯母谷北山村より大臺の上の順路は松浦武四翁多年の苦辛
て此山の名區異場遺なく巡拝せしを審みあし坐あふし北山の若
の岩角を憶いて一度の おし玉ふ登き書あり

皇典販賣所

奈良東向町

梓廼家中澤



